

2011 Fall Report

第4期生 福永 梢

2011.12.29

月	火	水	木	金
	8:00			8:00
9:00 ↓ COU 717 10:20	Work	9:00 ↓ COU 717 10:20	9:30 COU 730 13:00	Work
		12:00 Program Meeting ↓ 13:00		
13:30 ↓ COU 712 14:50	〔グループ課題の ミーティングなど〕	13:30 ↓ COU 712 14:50	〔グループ課題の ミーティングなど〕	〔グループ課題の ミーティングなど〕
(課外活動)		(課外活動)		

1. COU717: Lifespan Development (3 credits)

生まれる前から死ぬまでの発達を、身体、認知、社会・感情、言語などの側面から追った。各発達段階ではピアジェ、フロイト、エリクソン、Bronfenbrenner/Ecological System Theory など著名な発達理論のほか、信条や恋愛など特定分野における発達理論、更年期など特定の時期におけるさらに細かい発達理論なども学んだ。授業は主に講義で、時々グループ討議も行われた。グループ討議では、映画に基づいた事例について応用できる発達理論や対処法から、ろう・難聴者への応用、カウンセリングの手順や注意事項まで話し合った。中間、期末テストのほか、段階的、継続的発達理論からそれぞれ1つ以上選んで、特定の発達段階における問題について論じるレポートも2つあった。はじめのレポートは筆記英語、あとのもう1つはアメリカ手話にて提出した。一般的な問題を取り扱ったこれら2つのレポートが終わると、次はこれに対処法とその限界を加えて論じる事例研究レポートが課された。

はじめの分析レポートでは、保護者以外でも愛着関係の対象になりうることをエリクソンとボウルビイの発達理論を用いて論じた。あとの分析レポートでは、授業で一部鑑賞した映画「Child of City」の主な登場人物3人の青年期に注目した。彼らの健康な発達を阻むストレス因子と回復力について、エリクソンの発達理論とペリーの認識論(William Perry's Epistemology)の視点から考察した。事例研究レポートでは、更年期でストレス、遺伝、老化で進行性難聴になったキャリアウーマンを事例に、エリクソンとレヴィンソン(Daniel Levinson)の発達理論を用いた事例分析、対処法と課題を提案した。

この授業は知識の獲得にとどまらず、効果的なカウンセリング法を客観的・論理的に吟味し、対象者やその親、チームメンバーを説得するとき必要な技術の練磨にもなった。

2. COU712: Orientation to the Profession of School Guidance Counseling (3 credits)

専門機関、倫理・関連法律、プログラム計画と実施、個別教育計画（IEP）、多文化教育など、現場で基盤となる専門知識を学ぶクラスである。現場と関連させながら学べるよう、ろう・難聴児教育に取り組む学校を見学したりアメリカ心理学会（American Psychological Association, APA）の本部を訪ねたりするなどの課外学習も多かった。課外学習のたびに感想を1～2ページ書いた。このほか、アメリカ心理学会、米国スクールカウンセラー協会（American School Counselor Association, ASCA）をはじめ、ろう・難聴の子どもや多文化カウンセリングの専門機関について調べ、発表した。中間テストは2回あり、1つは一般知識、もう1つは公平な判断が難しい事例や場面について、アメリカ心理学会と米国スクールカウンセラー協会が独自に開発している倫理コードを当てはめるものだった。学期末のレポートでは実際にアメリカの中学校で起きた銃殺事件を事例にして、学校の安全、個別カウンセリング、集団カウンセリング（心理教育プログラムなど）、外部との連携など個人、学校、社会の3レベルでの対策案を述べた。

見学した学校にはそれぞれ独特の校風、教育プログラム、チームワーク体制があり、どこも勉強になった。例えば Patrick Henry Elementary School は移民出身の生徒が大半を占め、River School は聴こえる生徒とろう・難聴の生徒が半々在籍する口話教育主体の私立ろう学校、Maryland School for the Deaf（Columbia 分校）は古くから重複障害教育に取り組んでいるろう学校である。Patrick Henry Elementary School では見学だけでなく、院1回生たちで交流企画を催した。特に、先生のご提案で行った親とのパネルディスカッションは、現在進行形で子どもの将来や子どもとのコミュニケーションに試行錯誤している親たちの感情が移入してきて、なんとかサポートしたいという熱い気持ちに駆られた。期末レポートは複雑な事例に苦戦したが、「すべて」の生徒を擁護するスクールカウンセラーの責任と役割を改めて考えさせられた。つい自分と近い立場の人に共感し支援したいと熱くなるところを、冷静になって全体を見るよう心がけるいい機会となった。

3. COU730: Social and Cultural Diversity Foundations and Multicultural Counseling (3 credits)

移民大国アメリカでは文化や人種に併せて個人の多様化が急速に進んでおり、この社会変化に依るのクラスである。単一文化色が強い日本とは無縁のように見えるが、実際はスクールカウンセラーに欠かせない基本的な姿勢や心構えを学ぶのにとっても役立った。

多文化カウンセリング能力を身につけるために欠かせない「文化的意識 cultural awareness」、「文化的知識 cultural knowledge」、「文化的技術 cultural skills」、「文化的遭遇 cultural encounter」に沿ったクラス構成となっており、カウンセリング以前の基盤作りに焦点が置かれた。例えば、個人主義的思考と集団主義的思考はどちらにも長所短所があり、肝心なのは両者間のバランスとされる。アメリカ人生徒は個人主義的思考が強いことから、カウンセラーに欠かせないチームワーク力や全体を包括的

2011 Fall Report

第4期生 福永 梢

2011.12.29

に捉える視点を育てるために、ペア・グループ課題、活動が多く盛り込まれていた。授業の前半は講義、後半は活動と議論という配分は、意識と知識はいくらでもできて技術と遭遇は経験を積んで初めて身につくという考えに基づいている。

ペア課題（Cultural Encounter、CE）では、あまりよく知らない文化や宗教の団体と連絡を取り、その文化や宗教について知識を深め、彼らのいる場所へ行って交流した。これとは別にグループ（Sharing Views Group、SV）は4～5人構成となっていて、週に1回集まって1時間以上自由議論を行ったあとグループとしてのレポートを書くことが基本的な課題であった。学期末になると、人生における自己アイデンティティの発達過程をアートにして表現したり（Timeline Ball）、SVグループとしての発達、長所と短所、各メンバーの役割と特徴を発表したり、今学期を通して自分が学んだことを10ページのレポートに書いたりした。

私の場合、ペア課題にイスラム教を選んだものの、パートナーと正反対の文化が2つあってコミュニケーションやチームワークに苦戦した（パートナーはアメリカ人、デフファミリー出身のろうで、私は日本人、ヒアリングファミリー出身の難聴）。しかし、相手を理解しようとする姿勢を保てば、対立は相手をよりよく知る絶好のチャンスとなることを学ぶことができ、とてもよい経験となった。SVグループ課題でも、それぞれ異なる生育背景があり個々の価値観はそれに基づいていること、同じ言葉で表現されてもその意味やそこに至るまでの経緯は違うことなど、多くの大切な収穫があった。ちなみにこのグループメンバーは来学期も保持される。

私は集団主義的思考が強いため、個人主義に基づく見方や言動を少しずつ取り入れ、個人主義的思考の長所を身につけることが個人の課題であった。同時に、誰でもマジョリティー、マイノリティーの両方を経験することも学んだ。例えば、私ははじめ自分は英語もアメリカ手話も流暢ではない日本人留学生で、音情報にも大きく頼っている点でマイノリティーだと思い込んでいた。しかし実際は、ほかのアイデンティティカテゴリーになると自分はマジョリティー（高学歴、中流階級出身）になり、マイノリティー（例：レズビアン、カウンセリング学部で唯一の男生徒／40代）を体験しているのは自分だけではなかった。自分の中にある偏見や感情、社会における自分の立ち位置を認知することは、自分とクライアントにある相違を客観的にとらえ、クライアントの反応に柔軟に対応する力につながるという。このほか、日本は単一民族・文化と言うが実際はアイヌ人や琉球人などがおり、多文化カウンセリングは日本も例外ではないことも学んだ。これにとどまらず、この授業で学んだことは近年の日本にもみられるろう・難聴者の生き方やあり方の多様化に対応するとき大いに応用できると思う。

4. DST795: Culture and Language Diversity Seminar (9～11月、月1回：3 credits)

この授業は、ギャロデット大学内における多様化に追いつくために数年前から新入院生向けに設置されたものである。9～11月の間、月1のペースで土曜日に行われた。コミュニケーション手段、聴こえの程度、聴覚的・視覚的補助の選択、教育歴、人種・文化的背景などが異なる人がますます集まるギャロデット・コミュニティは今後どうあるべきか、どんな課題があるか、どう対処するかなどについて全体講義、小グループ議論が

2011 Fall Report

第4期生 福永 梢

2011.12.29

あった。各授業の最後に短い感想レポート、学期末に集大成としてギャロデット・コミュニティの今後について5ページのレポートが課された。

多様化・個人化する中で必要な知識やスキルが講義にも議論のスタイルにも組み込まれていた。講義ではまずろう文化や手話について、次に手話学習者と聴こえる人の視点について研究結果を交えながら解釈が行われた。そして、同じグループの人がマイノリティに対して差別的なことや非道徳的なことをしたとき、指摘したり正したりするAlliesのあり方や手順の紹介があった。議論では、手話学習者への情報保障や教育プログラム、ろう文化や手話の擁護とのバランスなどギャロデット大学で実際に問題となっている事項について具体的な対策案を出し合った。

このクラスは、異なる意見に対して反発するのではなく、理解するために質問したり解決に向けて妥協案を提案したりする方法を磨くのいい機会、カウンセリング場面でも役立つと思う。また、ろう者にとって視覚的情報が意味するもの、聴者にとって音が意味するものについての講義は自己アイデンティティにもつながるものがあり、自己理解だけでなく異なる立場にいる他人を理解する手掛かりにもなった。

次学期の目標

- ・ろう・難聴児者向けのカウンセリングの現状と課題を知る。
- ・病気や精神または発達障害に使われる薬とその扱い方について学ぶ。
- ・クライアントの福利と健康を目指したカウンセリングのあり方について学ぶ。
- ・心理学者として、調査研究の技術を磨く。